

お名前	性別	終戦時の年齢	現住所
森田 節子 <sup>せつこ</sup>	女性	17歳	豊川市

この体験記録は、昭和49年2月発行の新城地方教育百年史に掲載されていた手記です。

## 「豊川海軍工廠の被爆」<sup>こうしやう ひばく</sup>

空がなくなった。巨大なる工場群は、すべて黒煙の中に没した。製造中の弾薬<sup>だんやく</sup>がはぜるのか、爆裂音がしきりに続いた。無数の小さな炎が、煙を縫って舌なめずりをくり返した。防空壕から出た私は、諏訪の松林の中に突っ立って、ただぼう然と硝煙地獄を眺めていた。そのとき、その中で、22人も級の友の命が燃えつきようとしていたのだ。

昭和20年8月7日、終戦の8日前、B29の大襲来を受け、壊滅した豊川海軍工廠に、私たちが動員されたのは、昭和19年の4月、現在なら高校生として入学式に参列する年齢であった。遠い学徒は工廠の寮から、近い学徒は自宅から工廠へ通勤したのである。100名の新城高女生は総務部に配属され、庶務、労務、福利厚生などの事務所や刷版、電気などの工場が働き場所であった。後に刷版工場は廠外の諏訪へ疎開したので、私たち刷版工場の学徒からは犠牲者がでないはずだったが、折悪しく工廠の病院に入っていたMさんは、再びその美しい容姿を見せなかった。赤十字のマークなど、役に立たなかったのである。廠内にいた学徒の体験を3例ほど紹介すると、

いつも潮岬と伝えるラジオが、この日は敵機が伊良湖岬を北上中と告げるのを、Wさんは9時30分ごろ聞いたという。地下発令室の隣の防空壕に入ったが、爆弾で階段が破壊され、天窗から脱出、正門かたわらの自転車置き場も、工員養成所も跡形なく消えていた。夢中で逃げ、市田へ出る門を通過して外へ出ると、中学生の男子が遺体の片づけをやっていた。堀一面丸太が浮いていると思ったのは、みな死者だったという。

Sさんは、池のかたわらの防空壕に入ったが、すし詰め<sup>すしづめ</sup>の満員だった。爆風で入口の木枠が崩れ、体を小さくして脱出、東へ東へと逃げたつもりが、西へ西へと走っていた。ヒューヒュー、ザザザザザという爆撃音をくぐって一目散に駆けるうち、いつの間にか麻裏が脱げてしまい、はだしになっていた。イモ畑で何度も転びながら、諏訪の松林にたどり着いたとき、防空頭巾が燃えていた。O先生に、学校へ報告に行くように言われ、飯田線で東新町へ帰ったが、家によると、風呂をわかしてくれたので、体中に浴びていた血しぶきを洗い落としてから学校へ行った。その後一週間、足の裏の痛みと恐さ<sup>おそさ</sup>とで工場を休んだので、てっきり

死んだものと思われていたという。

Tさんは、今でも右足に白い包帯を巻いている。傷あとを隠すために。防空壕を出たとき、先に出た級友は影もなく、自分もいつの間にかけがをしていたという。結婚して3児に恵まれたが、どうも体の調子がすぐれない。胃が悪いのかと検査を受けたり、肩こりがひどいので、長い間あんまさんに通ったりしていた。電気治療を始めたところ、肩に痛みがでてきた。後に分かったが、電気治療器の磁気が働いて爆弾の破片が動き始めたのである。

その時は原因不明で、病院を転々としたあげくようやくレントゲン写真の影を、ある医師が戦争の後遺症ではないかと気づいて、親指の頭大の破片を摘出したのは、昭和47年であった。

その後、体の調子はすっかりよくなったというが、この長い間の苦しみに対し、国からは何の補償もないのである。

戦争さえなかったら、戦死（あえてこういう）した22人の級友たちも、当時の自分たちの年齢をこえる子どもたちに囲まれて、幸せな日々を送っているであろう。生き残った私たちにも戦争のつめあとはつかなかったはずである。

教師に死者はなかった。名古屋へ動員された一年下級の生徒たちの工場へ視察に行っていて、警戒警報がでると、すぐ新城へとんで帰ったという校長は、鬼畜米英と連呼したものだ。後年、同級会に出席した彼は得々として言った。「今私は、女子高校の英語教師だ。」諏訪の松林に収容された何百という遺体のすさまじい死臭を、私たちは一生忘れない。

(以下 解説文)

戦争は、学校施設をはじめとする物的な面で教育を崩壊に導いただけでなく、生徒の心に教師不信という消えがたい傷跡を残し、教育を内から完全に破壊してしまったことをこの手記はものがたる。それは教師にとっても生徒にとっても最大の不幸であった。

終戦の翌日、学徒動員は解除され、「諸君のあらゆる努力にもかかわらず、諸君の純忠の奉公は遂に報いらるるところなく帝国は敗れ去ったのであります……」という訓令を出して、県青少年学徒勤労働員本部は解体した。学徒たちは、すさまじき心で、荒れ果てた学園に帰った。